

月例研究会 (2018年3月14日)

Political Imagination of the Diasporic Korean Radicals in the Post Colonial Period

クリス・パーク

本報告は、植民地支配からの解放から冷戦期にかけての時期における、アメリカと日本の急進的な朝鮮人の political imagination (以下、政治的想像) を論じた。当時、アメリカと日本に居住していた朝鮮人たちが異なった空間、文化、社会構造のなかでどのような形の政治的想像を形成したのか、より具体的には、朝鮮戦争の下でアメリカと日本で発達した草の根反戦運動がどのような異なった形態をとったのかについて検討した。本報告の論点は、急進的な朝鮮人の政治的想像が、人種差別、社会的不正義、アメリカ帝国主義の拡大やネオコロニアリズムに対抗するビジョンを包摂し、ローカルとグローバルの接点 (intersection) において、抑圧された人々や労働者との草の根レベルの連帯を促進した、ということである。

アメリカの朝鮮戦争への介入を共産主義の拡大を防ぐ「反共十字軍」とする支配的見方に対し、アメリカ帝国主義の拡大を批判する対抗的な見方も形成された。アメリカの急進的朝鮮人たちは反戦運動を行い、American Peace Crusade (APC) は朝鮮戦争での残虐行為について広く知らしめるキャンペーンを実施した。公民権運動の活動家である W.E.B. Du Bois やコリアン・アメリカンの労働組合オルガナイザーの Peter Hyun は APC の反戦運動に参加した。彼らがカリフォルニアで行ったイベントは、アメリカの軍事介入を厳しく批判しただけ

でなく、人種間の不平等と朝鮮半島での白人至上主義的な「植民地戦争」との関係性も明らかにした。

反戦運動におけるアフリカ系・アジア系アメリカ人の連帯は2つの意味で重要であった。第一に、原爆実験、軍事費拡張、アジアへの介入の拡大に基づいた「冷戦的平和」に反対したこと、第二に、アメリカ社会とアメリカの軍事的拡張に内在するレイシズムに対抗する非暴力的直接行動を促したことである。

日本の急進的在日朝鮮人の政治的想像は、アメリカの冷戦プロジェクトの下で進められた日本の再軍備・武装化への反対闘争に結びついた。在日朝鮮人は1950年に在日朝鮮人統一民主戦線(民戦)を日本共産党の支援で結成し、在日中国人や日本人の左翼労働者たちと連携して反戦運動を行った。1950年から52年の間、朝鮮戦争に介入したアメリカ軍を武器や石炭などの生産を通じて間接的支援した日本企業に抵抗するため、6000件ものストライキ、集会、抗議行動が実施された。1951年に結成された朝鮮祖国戦線防衛委員会(PHC)は、急進的な前衛主義を取り、日本の軍需工場や米軍施設の破壊を目的とした直接行動を行った。PHCの政治的想像は、日本がアジアの火薬庫になること、アジアの人民がアメリカ帝国主義に支配されることへの強い懸念に特徴づけられた。

このように、アメリカと日本の急進的な朝鮮人の政治的想像は、反戦運動を通じてローカルの社会問題と朝鮮戦争によるアメリカ帝国主義の拡張という国際問題を結び付けた。急進的な政治的想像は、レイシズム、軍国主義、植民地主義に、国を超えた草の根連帯を通じて対抗することを目指した。

(Chris Hyunkyu Park オーストラリア国立大学大学院博士課程/法政大学大原社会問題研究所元客員研究員)